

2 「菊花の約」私案

一

『雨月物語』第二番目の作品「菊花の約」は典拠である中国白話小説「范巨卿鷄黍死生交」（『古今小説』第十六卷）巻頭の「結行交」をふまえた有名な美文から始まります。

青々たる春の柳。家園に種ることなかれ。交りは軽薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも。秋の初風の吹に耐めや。軽薄の人は交りやすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染れども。軽薄の人は絶て訪ふ日なし。

「軽薄の人」との交際を戒めるこの冒頭文に続いて語られるのは、清貧の儒者丈部左門と清廉なる兵学者赤穴宗右衛門との死を超えて守りぬかれる信義の物語です。そして、篇末にふたたび、

咨軽薄の人と交はりは結ぶべからずとなん。

と冒頭の教訓がくり返されてこの作品は終わることになります。いわば左門と宗右衛門の「信義」の物語は一種の円環構造のなかに封じ込められているわけですが、原話の終わり方はこうではありません。范式・張劭ふたりの友情の深さをたたえる「踏莎行」なる詩が置かれているのです。

千里途遙 隔年期遠 片言相許心無_レ變 寧將_二信義_一托_二遊魂_一 堂中鷄黍空勞勸

月暗燈昏 淚痕如_レ線 死生雖_レ隔情何限 靈輻若候_二故人來_一 黄泉一笑重相見

冒頭に「輕薄児」との交際を戒める詩を置き、それに続いて范式・張劭の深い友情の物語が語られ、最後はふたりの友情をたたえる詩で終わる、という原話の構成はそれなりに首尾一貫しており、冒頭の教訓も以下の物語に対して十分に反語的な役割を果たしているといえます。

しかし、「菊花の約」がこうした原話の明快な構成を採用しなかったのはなぜか、冒頭の教訓を末尾でもう一度くり返すことによつていかなる効果が生まれるのか、等について従来の研究はほとんど答えるところがありません。それらの多くは冒頭文との関係を中心に考えていて、結語についてはつけ足しのようにしか扱っていないからです。

もう一度、左門と宗右衛門との「信義」の物語を読み直していくことを通して、この問題を考えてみたいと思ふゆえんです。

二

丈部左門と赤穴宗右衛門の物語については、「簡潔な表現で、純粹な人間の信義一筋に徹する生き方と行動が、明確に、しかも直接に描き出されている」(鶴月洋『雨月物語評釈』)というふうな評価が今日最も一般的なものです。しかし、彼らの「信義」や「友情」を成立させている基盤に目を向けていくならば、この物語をただ単に美しく感動的であるといつてすませるわけにはいかなないように思われます。そして、こうした要素もこの作品においては無視してならないものだと思うのです。

この点に関してまず第一にあげるべきは左門の言動のいくつかですが、これに関してはすでに松田修氏のすぐれた指摘(2)がありますので、氏の指摘を箇条書きにしておくとおきます。

(1) 病で苦しむ宗右衛門を見舞おうとした左門に対して「同じ里の何某(なにがし)」の主人は「瘟病(おんべう)は人を過(あや)つ物」だからと行くのを止める。が、左門は「死生命(せいめい)あり。何の病か人に伝(つた)ふべき。これらは愚俗(ぐぞく)のことばにて吾們(ともがら)はとらず」と答えていて、「何某(なにがし)」の主人を「愚俗」呼ばわりしている。

(2) 快方に向った宗右衛門が左門に感謝の言葉を述べたのに対して、左門は（このとき宗右衛門はまだ「何某」の主人のもとに世話になっているにもかかわらず、わが家で世話しているかのように）「猶逗(とど)まりていたはり給へ」と答えている。

(3) このあとも、左門は「何某」の家に滞在している赤穴のもとを訪れ「日夜交(ひるよるまじ)はりて物がたり」している。松田氏は、これらの言動にみられる左門の性格は「偏奇」にして「迂愚」なるものであると述べています。この指摘は大変有意義かつ示唆に富むものですが、氏はそこからさらに、こうした性格設定は「信義の士」であるべき左門の人物像にふさわしくない不用意なもので、それは作品の欠陥に通じるものだ、と論をすすめていくのですが、この論法には納得できません。おそらく松田氏にとって「信義の士」である左門や宗右衛門は完全無欠の理想的人間として描かれていなければ満足できないようなのですが、果たしてそうでしょうか。私自身は、この作品が理想的な人物による理想的な物語として書かれていない点にこそ今日的な意義があると考えているのです。それゆえ、左門が松田氏のいうごとく「偏奇」にして「迂愚」なる性格であること、私流にいい直せば、自己の価値観を絶対視し、他者に対する顧慮を欠いた独善的な性格の持ち主であることが「信義」の主題と密接不可分であるとみなすところから出発しなければならぬと思うのです。

さて、左門に対するこうした理解からするならば、冒頭に書かれている左門母子の「清貧」についても別の見

方が可能になるでしょう。すなわち彼らの「清貧」は「母子の賢きを慕ひ、娘子を娶りて親族となり、屢事に托て物を餉」ろうとする佐用氏の好意を「口腹の為に人を累さんや」という一語のもとにはねつけてしまう性質のものなのです。どうも彼らの「清貧」はいささか狭量にすぎるように思われます。「清貧」であることに構えすぎる姿がうかがえるようです。

また、さきの例では「何某」の主人公が、そしてこの例では佐用氏が、左門らに対して好意的であるにもかかわらず、必要以上に不当な扱いを受ける姿が描かれています。その理由はむろん彼らの側にあるのではなく左門の側にあるのですが、おそらく、これらはすべて「友とする書の外はすべて調度の絮煩を厭ふ」と書かれている彼の、現実生活の試練を経ない観念性によるものといえましよう。

そしてもう一点、改めていうまでもないことですが、左門の背後に常に母親がいるという事実、しかも彼女が左門の最もよき理解者であり庇護者であるという事実も、左門という人物を考えるうえできわめて重要な点であることを忘れてはならないでしょう。

「菊花の約」という作品は、左門のこうした性格が生み出す悲劇として読むことが可能なのですが、そのことが典型的に示されるのは宗右衛門との別離の場面だと思われれます。少しくわしくこの場面をみることにしましう。

出雲の動静をさぐるために暇を乞うた宗右衛門に対して、「さあならば兄長いつの時にか帰り給ふべき」と左門がたずね、宗右衛門の方が、「おそくとも此秋は過ぎ」と答えるあたりまでは、ごく尋常な会話といえます。が、この返事に満足できない左門が、「秋はいつの日を定て待べきや。ねがふは約し給へ」とせまり、「重陽の佳節をもて帰来る日とすべし」と応じた宗右衛門の答えにさらに重ねて、「兄長必此日をあやまり給ふな。一枝の菊花に薄酒を備へて待たてまつらん」と念を押すに至って、この会話には松田氏も指摘するように「信義の交

を逸脱した」尋常ならざる雰囲気が生まれてきます。

ふたりの間に同性愛的な関係を想定するのもあながち不当とはいえないと思います（ただし、そこからまた例によってこの関係が「信義の士」としての設定に反する云々と論をすすめていくのは感心しませんが）。私もあえてそのことに異を唱えようとは思いませんし、その気になれば菊をはじめとして同性愛を暗示するシンボルはいくらも発見できるでしょう。が、重要なのはふたりが同性愛の関係にあるか否か、ということではなく、これまでみてきた左門という人物の性格の延長上にこの場面が描かれているという点です。この会話に特異なものが発見されたとしたら、それはすべて左門の側に理由があるはずで、このことさえ確認できるなら、ふたりが同性愛か否かということはそれほど重要な論点ではないとさえいええます。

そうして、自己の感情にのみ忠実な左門の性急な言葉にせまられて宗右衛門が「重陽の佳節」——九月九日という日を設定したそのとき、ふたりの悲劇は始まったといえます。この九月九日という日付自体は原話に倣ったものですが、原話の場合は別れた日が九月九日で、ちょうど一年後を再会の日とするというわけで充分に必然性のある設定となっています。が、「菊花の約」の場合は全く偶然に決められたものであるにすぎません。出雲で何が待ちかまえているか不明であるにもかかわらず、あえて九月九日という日を設定しなければならなかったのは、左門の激情に宗右衛門が引きずりこまれた結果なのです。そう考えてくると、本篇の悲劇の最大の原因は実にここに存している、といって差し支えないと思われれます。

ただ、この事実は左門にも、また宗右衛門にも気づかれることはありません。左門は「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず」と揚言した宗右衛門の言を信じ、「赤穴は信ある武士なれば必約を誤らじ」とひたすら待ち続けるだけですが、宗右衛門の方も、いささか理不尽でさえあるこの約束に積極的に身を投じていきます。その根柢はおそらく、彼が兵法家を自任しながらその本質においては放浪者であるというところに求められるで

しょう。近江では佐々木氏綱に尼子討伐を進言して容れられず、「故なき所に永く居らじと、己が身ひとつを竊みて国に還」ろうとし、出雲に下つてからも経久は主君とするに足らずとみて、再び「永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約ある事をかたりて去ん」とする宗右衛門にとっては、森山重雄氏がいみじくも指摘することく、左門との「菊花の約の「信」にしか帰るべきところがなかった」のです。兵法の学という最も現実的な学を修めながら、彼は結局現実のなかで自らの学を生かしていくことが不可能であった人物なのです。それゆえにこそ「友とする書の外はすべて調度の絮煩を厭」う左門と兄弟の約束をむすぶことが可能だったのです。

こうしてみてみると、左門も宗右衛門ともに理想的な人間として描かれていないことが明らかです。そうであるがゆえに、ふたりのあいだに成立している「信義」なるものは、一般の人間にもあてはまる普遍的な規範とみなすべきではないこととなります。むしろ、特殊な状況下にある特殊な人間たちの物語とみるべきでしょう。そして、そのようにみることが許されるならば、この物語はきわめて倫理的な主題を扱いながらもその倫理自体を相対化した作品であるといえるのではないのでしょうか。この作品が単なる美談として終わっていない最大の理由がここにあります。

三

以上、私はややくどいほどにこの作品が性格悲劇としての特色を備えていることを述べてきました。また、ふたりの「信義」の持つ特殊な面を必要以上に強調しすぎたかもしれません。が、従来、ふたりの「信義」はあまりにも一般的・普遍的に語られすぎたと思います。左門や宗右衛門に同化し、声高に「信義」を守りぬくことの尊さを語るあまり、彼らの「信義」のために犠牲になった人々のことは忘れ去られてしまったのです。「何某」

の主人や佐用氏もそうですが、何といっても悲惨な運命をたどるのは赤穴丹治です。彼は左門によって「不義の人」と断罪され斬り殺されてしまいますが、彼は単に主君尼子経久の命令を忠実に履行しただけで、左門に斬り殺されねばならないほどの悪人でないことは高田衛氏も指摘するとおりです。その意味では、丹治の死は「蛇性の婬」における富子の死とともに全く無意味な死といえます。まして彼を「軽薄の人」と断じる説のごときは見当ちがいはなはだしいといわねばなりません。しかし、左門の論理によって丹治は斬られるべきであったと結論づける説は現在なお根強く存在しています。それゆえ、ここでは、左門のふりかざす論理の相対化を試みることにしたいと思います。そして、それはそんなにむずかしいことではありません。

左門が丹治を攻撃する論拠としたのは『史記』商君列伝に出る魏の宰相公叔座の言葉です。彼は魏王に自分の後任として商鞅を推薦し、もし登用しないなら後々のため殺すべきだと進言します。そして、その後ひそかに商鞅を呼んで彼は、

吾汝をす、むれども王許さる色あれば、用ゐずはかへりて汝を害し給へと教ふ。是君を先にし、臣を後にするなり。汝速く他の国に去て害を免るべし。

と忠告したのです。

左門はここまでの例を取り上げて、魏王・公叔座・商鞅三者の関係は尼子経久・赤穴丹治・赤穴宗右衛門三者の関係に比定しようとして丹治の行動を非難したのでした。しかし、『史記』のその先を読んでいくと、公叔座のこの言は魏王にも商鞅にも受け容れられていないことがわかります。魏王は商鞅を登用せず、また殺そうともしていません。一方公叔座から忠告を受けた商鞅の方も、王が私を登用しないならば私を殺すはずがない、と主張して魏から逃げ出したりはしなかったのです。すなわち魏王は公叔座が評価するほどには商鞅を評価せず、商鞅もまた、自分を軽んじている魏王がわざわざ自分を殺すほどの手間をかけるはずのないことを見抜いていたの

です。その意味で、公叔座の言は現実的には全く無効のものでしかなかったのです。

その後機会を得て、商鞅は秦の宰相となり魏を苦しめることになるわけですから、公叔座の「後の禍となるべし」という予言は的中したことになります。ただこの「禍」といういい方にも示されているように、この商鞅なる人物は『史記』のなかではあまり肯定的に書かれておらず、司馬遷の評価も非常にきびしいものです。

ともあれ、左門が論拠とした公叔座の言葉が、魏王にも商鞅にも受け容れられていないという事実は、彼の議論の性格を考えていくうえで大変重要なことです。左門の論理は歴史的文脈を無視して、言葉のみ、論理のみを引き出してくるというもので、論理的整合性はあるものの現実的有效性を全く欠いた議論になっています。

このことは、尼子に仕えなかった宗右衛門を「義士」とし、尼子に仕えた丹治を「士たる義なし」ときめつける論法にもあらわれています。宗右衛門の言に従えば彼は尼子経久が、

智を用うるに狐疑の心おほくして、腹心爪牙の家の子なし。

という人物であるがゆえに仕える気をなくしたのであって、「義」によって仕えなかったのではないはずです。

これは戦国の世に生きる武士としては当然のことで、丹治の場合は経久に対する評価を宗右衛門と異にし、彼に仕える方を選んだだけのことです。そのことで非難されるいわれは何もないといわねばなりません。

こうして、左門の論点のいちいちを検討していきますと、表面上の論理的一貫性はあるものの、それはあくまで左門の頭のなかにある「武士」という観念を前提とするかぎりにおいて受け容れられる性質のもので、現実的有效性という観点からみれば彼の論理はたちまちのうちにくずれさっていくものでしかないのです（もっとも、これまでみてきた左門の性格を考え合わせいくならば、こうした未熟な論理をふりかざす左門の姿にはそれなりの一貫性があるといえますが）。

そして、丹治は、その左門の身勝手な論理に反論する機会も与えられないまま、左門によって非業の死を遂げ、

左門もまた逐電して行方不明となります。

吾^ま幼^なきより身を翰^{かん}墨^{ぼく}に托^{たく}るといへども、国に忠義の聞えなく、家に孝信をつくすことあたはず、徒^{いと}らに天地のあひだに生^うま^まるゝのみ。

と嘆いていた左門は、行方をくりましたこの段階に至って初めて母親や「書」の世界から自立して現実と対決することを強いられることになるはずですが、しかしそれを語るためにはもうひとつ別の物語が必要です。

ともあれ、こうして、左門という強烈な個性とそれにまきこまれた人々による「信義」の物語は完了することになるわけです。

四

さて、丈部左門と赤穴宗右衛門との「信義」の物語を以上のようなものとして把握した場合、冒頭文及び結語にもりこまれた「軽薄の人と交わりを結ぶべからず」という教訓はいかなる機能を有することになるでしょうか。この問題を考えるにあたってひとつだけ確認しておきたいのは、作品に属するものと作者に属するものとのをはつきり区別しておきたいということです。今日でもなお、作者は軽薄の人を憎み、信義の人を愛したがゆえにかくのごとき文を綴った、とするような単純な論が横行しているのですが、これは作品中の議論や主人公の思想はそのまま作者の考えであるというきわめて素朴な読み方に基因するものです。宗右衛門を看病する左門に作者の医師体験の投影をみたり、左門と宗右衛門との友情に作者と加藤宇万伎との交情を重ね合わせたりする読み方も同じ基盤に立つものですが、こういう読み方を私はとりません。主人公の思想とか地の文に書かれていることは、総体としての作品の一要素であるにすぎず、それだけを取り出して論じても無意味だと思ふからです。

さて、そういう前提に立って考えてみた場合、「軽薄の人と交わるべからず」という教訓に冒頭部と末尾をはさまれたこの物語が、もしも理想的な人物による理想的な物語として書かれていたならば、それらはごくまっとうな教訓としての効果を発揮したことでしょう。しかし、この物語はすでにみてきたとおり、人物も状況もきわめて特殊なものとして書かれているのです。その意味では、この物語は「信義」がいかに大切であるかという点とよりもむしろ「信義」を全うすることが一般の人間にとっていかに困難であるかを語るものです。ここに描かれている「信義」とは、「信義」の観念にとりつかれ「生」のすべてをその一点に凝集しうる者、あるいは自らに課せられた「信義」を果たすことより他に自己の生存の場所を見出しえない者以外には実現不可能なものなのです。

このとき、冒頭部と結語に含まれる教訓はほとんど色あせ、無意味化されてしまうのではないのでしょうか。一般化・普遍化しえないきわめて特殊な「信義」の物語が語られたあとで、

吝軽薄の人と交はりは結ぶべからずとなん

とくり返してみても、それは空しくひびくだけです。そして現実の読者には、かえって彼ら自身が他ならぬ「軽薄の人」であることに気づかざるをえず、それと交わりをむすばずに生きていくことが不可能であることを知らされるだけなのです。

いわば、「信義」のテーマを極限まで追い込んでいった結果、一般の読者の前には、否定されるべきはずの「軽薄の人」の現実性がかえってあざやかに印象づけられることになってしまったのです。

その意味で、この「菊花の約」という作品は、原話を忠実になぞりながら、結果としては原話のテーマを百八十度転換させようとする意図にみちたきわめて野心的な作品といえるのではないのでしょうか。

【注】

- (1) 従来の研究については、金井寅之助「『菊花の約』の構成」(『松蔭女子短期大学研究紀要』七号、昭和四十一年二月)などを参照のこと。
- (2) 以下、松田修氏の指摘として引くものはすべて「『菊花の約』の論—雨月物語の再評価(2)—」(『文芸と思想』二四号、昭和三十八年二月)による。
- (3) 詳述はさけるが、彼女が赤穴の亡霊の到来を信ずる経緯などをも参照のこと。
- (4) 森山重雄『幻妖の文学上田秋成』(三三書房刊、昭和五十七年二月)。
- (5) 高田衛『上田秋成研究序説』(寧楽書房刊、昭和四十三年六月)。
- (6) 重友毅『雨月物語評釈〈増訂版〉』(明治書院刊、昭和三十一年十月)。
- (7) 鷺山樹心「『菊花の約』—衆道論存疑—」(『花園大学国文学論究』八号、昭和五十五年十月)、のち『上田秋成の文芸的境界』(和泉書院刊、昭和五十八年十月)に所収。